

【聖書】

ルカによる福音書21:29 それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。30 葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。31 それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。32 はっきり言うておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。33 天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

34 「放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に畏のようにあなたがたを襲うことになる。35 その日は、地の表のあらゆる所に住む人々すべてに襲いかかるからである。36 しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

37 それからイエスは、日中は神殿の境内で教え、夜は出て行って「オリーブ畑」と呼ばれる山で過ごされた。38 民衆は皆、話を聞こうとして、神殿の境内にいるイエスのもとに朝早くから集まって来た。

1 最後の譬え話

横浜に来て五回目の春を迎えています。今まで牧師館の庭にあまり出ずに暮らして来たのですが、今年になってから、同居猫のリム君を抱いて、日に二、三度は、庭に出るようになりました。最初は、外に出たがる猫を抱いて渋々出ていたのですが、最近では私も短い庭の散歩を楽しむようになりました。猫と一緒に庭の草木を見ていると、勢いよく生えている雑草さえも、毎日、様子が違って面白いのです。金木犀の木に新しい葉が出る様子にも初めて気づきました。最初、複数の細長い葉が蕾のように閉じているものがついた細い枝が出てきます。そして桜の花が散る頃には、青々とした葉が満開の花のように開くのですが、同時に細かった枝も頼もしく太くなっています。その様子を見ていると、木は、人間よりもよほどよく「時」を知っているなあ、と感心します。ですから、今日の主イエスの「いちじくの木や、他のすべての木を見なさい。葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずとわかる」という言葉を聞いた時、本当にそうだなあ〜と思いました。

しかし、主は「いちじくの木が葉を出始めているから、そろそろ夏だね」と雑談を楽しんでいるわけではありません。譬え話、それも最後の譬え話です。この後の22章から、いよいよ主イエスの死の物語が幕を開けるからです。勿論、主はご自身の十字架が近い事をご存じだったでしょう。自分の十字架の死を目前にした主は、弟子達や民衆を何としても救いたいという一心で、このいちじくの木の話をお話されたのだと思います。主は、この最後の譬え話を通じて、弟子達や民衆にどんな事を伝えようとしたのか、そしてこの

主の言葉は、2000年後を生きる私達に何を語り掛けているのでしょうか、ご一緒に心と耳を傾けていきたいと覆います。

## 2 神の国が来るのを待ち望みなさい

旧約聖書には、いちじくの木が沢山出てきます。今日は時間の関係上、一つ一つ上げることはできないのですが、「いちじくの木」は、神の民・イスラエルの平和と繁栄のシンボルであったようです。更に、主イエスは、いちじくの木だけでなく、他の全ての木もさして、「よく見なさい」と言われています。「イスラエルの民の様子や、イスラエル以外の全ての国々、この世界の様子をよく注意して見ていなさい」と弟子達と民衆に語りかけておられます。更に、「葉が出始めたら、既に夏の近づいたことが分かる」と続けます。この「夏」は、日本で言えば、「春」のこと。イスラエルには春がなく、突然、冬から夏となり、あちこちに花が咲き乱れる美しい季節を迎えるそうです。

この譬えが、何を示しているかという、主ご自身が直後に教えてくださいます。31節。「それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。」“これらの事”とは、21章7節から語られる「終末の徴」のこと。「自分が神からの救い主、メシアだ」と名乗る偽者が大勢現れる、戦争や暴動、大きな地震や飢饉や疫病が起こる、イエス・キリストを信じる者達への激しい迫害があり、やがて、神の都エルサレムは、ローマ軍の力によって破壊し尽くされます。更には、そののち、どれほどの時間が流れた後かは分かりませんが、罪と死に縛られたこの世界の終わりがやって来ます。それは、私達人間の思い描く事ができない終わりの日。世界が揺り動かされ、全宇宙が壊れていく、神の審きの日が来る、と主は語ります。みんなが滅びに恐れおののき、絶望の声を上げるその時、真の救い主キリスト・イエスが再び来られると言います。人の子、つまり、この神殿での話の数日後に、十字架と復活を成し遂げられ、父なる神の御許に帰って行かれる事となるイエス・キリスト。そのお方が再び、目に見える体をとって、天の御神の力と栄光に満ちて、この世界にやって来られる。その時こそ、神の国、神の支配がこの地上に完成する、と主は語ってこられました。

ここで先ず、気づかされるのは、私達が神の国の方に行って、神の国を自分達の方へと引き寄せるのではない、まるで夏の季節がイスラエルに巡り来るように、神の国は、向こうからやってきてくださると主が約束しておられる事です。「私はもうすぐ去っていく。しかし、再び必ずやって来る。神の国の完成と共に必ずやって来る。それまで待っていなさい」と、主はこの譬え話を通じて弟子達、私達にそう語っておられるようです。

## 3 主の言葉は滅びない

ですが、終わりの時、神の国が現れる時は、神の審きが現れる時、世界全体が滅ぶ時です。私達は自分達の力で世界の亡びを静かに受け入れ、主が来られる時を待つ事ができる

でしょうか。人生の些細な出来事にさえ、オロオロと行き惑ってしまう私達でありますのに。

主イエスは、そんな弟子達、私達の弱さをよくよく知っておられます。だから、約束の言葉をくださいます。32節、「**はっきり言うておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。**」先頭の「はっきり言うておく」という言葉は、直訳すれば「アーメン、私はあなた方に言う」。主は、ご自身を殺す者達が支配する厳しい世界に弟子達を残していかねばなりません。「あなた達は、私のこの言葉を決して忘れるな！この言葉によって生き抜け」と思って「はっきり言うておく」と語られたのではないのでしょうか。弟子達への深い思いを込めた主イエスの声が響いているような言葉です。

そして、主は続けます。「**すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。**」全ての事というのは、先ほども申しました第21章7節から語られています終末の徴、この世界の滅びが始まる兆候です。次の、「時代」という言葉は、<世代>とも訳せる言葉で、多くの英語訳聖書では、「generation」という単語が使われています。つまり、ここで「時代」と訳された言葉は、「実際にその時を生きる人々と密接に結びついた時代」を示しているのです。その時を生きる人々も含む「時代」です。では、「決して滅びない」と主イエスが断言されるのは、どんな人々と結びついての時代なのでしょう。

次の言葉が示しています。「**天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。**」(33節)「全世界、全宇宙が滅び去っても、私の言葉は決して滅びない！」そう高らかに宣言されていますが、ここで主が言われている事は、全世界が滅び去った何もない世界にただイエス・キリストの言葉が漂っている、というのではないでしょう。天の御神の言葉、主イエスキリストの言葉は、聴く者を求めます、聴く人間がいて、神の言葉となるのです。何故なら、父なる御神は、私達人間なしでは神であろうとはされないお方だからです。主の言葉が滅びない、のであれば、そこには必ず、主の言葉を深く真実に聴く人々がいる、主の言葉に生きる人々がいるのです。だから、33節の決して滅びないという「この時代」とは、主の言葉を聴き、主の言葉と深く結びついて、主の言葉に生きる人々がいる時代といえます。主の言葉と深く結びつきそこに生きる人々は、この世界が滅び去ろうとも、決して滅びる事はない、と主は約束しておられるのです。

#### 4 心が鈍くならないように

では、イエス・キリストの言葉と深く結びついて、主の言葉に生きるとは、具体的にどのようなことでしょうか。主は続けて仰います。34節、「**放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。**」ここで「心が鈍る」と訳されているギリシャ語は、「心が重くなる」「心が押しつぶされる」とも訳せる言葉です。心が重くなったり、押しつぶされると、感覚が鈍くなってしまいます。鋭く繊細な感覚を持つ心を失わないよう、気を付けていなければならない、と主は言うておられるのでしょうか。しかし、心を硬直させ

鋭くする事ではないと思います。寧ろ、柔らかく繊細な感覚を持つ、しなやかな心を主は望んでおられるのでしょうか。「放縦や深酒、生活の煩いを捨て、しなやかで鋭敏な心を持ちなさい」と主は仰っているようです。

しかし、心のしなやかさを失わせ、感覚を鈍くさせてしまうものが、私達の生活には沢山あります。その一つが放縦であると主は言います。自分の勝手気ままな欲望に走る生活の在り方は、私達の心を鈍くする、寝ぼけさせると主は言われるのです。欲ボケです。その通りです。私自身、この主の言葉の前に深く悔い改めさせられています。また、深酒。酒にひどく酔う事によって心が鈍くするのを戒める言葉です。ですが、何故、人は、深酒や放縦をするのでしょうか。

わざわざ放縦や深酒をして自分を鈍くさせたいと願う心があるからでしょう。鋭敏な心を持ってこの世界を生きていけば、私達はストレスにまいてしまう。だから、感覚を麻痺させたい、放縦な生活をして、酔ってしまいたい。お酒だけではなく、ギャンブル依存や買い物依存、仕事依存だってそうです、誰か人間を神のように崇拜し深く依存してしまうという事さえあります。「いちじくの木やその他の木を注意して見なさい」と主が仰るのとは逆に、この世界の現実、自分の現実から目を背け、感覚を麻痺させてしまいたい、というのは、私達の中に多かれ少なかれある傾向だと思います。

ですが、私達は現実を観ない事によって、自分達の思う以上の事から目を背けていることとなります。それは何でしょうか。主は言われます。36節。「**人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。**」「人の子の前に立つ」というのは、同時に起こる神の審きの事をも示します。「神の審きのさなか、人の子、イエス・キリストの前に立つことができるように」という意味です。つまり、放縦や深酒や生活の煩いによって現実を観ないことによって、私達が見失うのは、「いつかは神の審きの前に立つ自分と、そこにいてくださるイエス・キリスト」という終わりの日のあり様です。終わりの日に現れる神の審きとイエス・キリスト、そしてそこで顕わになる自分の本当の姿に対して心を鈍くさせ、考えないようにする、目を背けて生きる。しかし、主イエスは、却ってそれは滅びの道だ、と仰っているのです。私達は、滅びが怖いばかりに、自分の現実から目を背け、心を鈍らせる。そして、神に何も祈り求めなくなるのです。その結果、神から離れてしまい、いつかは神の審きの前に立つ日が来る、という事をすっかり忘れ、自分を主人として生きてしまうのです。

しかし、私達がどのように生きようとも、神の審きの時は必ず来ます。この終わりの日を想うとき、「自分もまた、必ず、自分のやってきたことを主に問われる時が来る。その時、自分はどんな言い訳を、父なる神にできるだろうか。」御神に自信をもって「自分には一切の罪はなく、救われて当然の者だ」と胸を張る事ができる人はいないのだと思います。およそ人として生きる者は、多くの過ちを犯し、自分の罪に人を傷つけ、自分もまた人の罪に傷つけられる者、様々な出来事に一喜一憂し、うろろうと道に迷いつつ生きる者です。自己中心的に生きてしまう者です。そんな私達一人一人の罪が、この世界を造り上げてし

まっています。シリアの難民キャンプでは、貧しい子供たちが誘拐され、内臓が抜かれた死体がゴミ捨て場に放置される世界。遠い国の話ではない、私達の住む国も本質的には変わりません。感染症を抑え込む事よりも、利権まみれのオリンピックを強行しようとする人々がいます。入国管理局では、難民たちを医者にも見せずに見殺しにしている現実があります。命よりも、自分達の富や体面を優先する社会を私達は造りあげています。そうして、そんな世界の中で自分が歩んできた道を考えれば、悔やむ事も色々あり、様々な思いにさいなまれるでしょう。鋭い感覚を持てば持つほど、自分と世界に絶望し、深くうなだれるしかありません。

しかし、しかし、そうであるからこそ、猶更、私達は、神の審きのただ中で、この主イエスの前に立ち、このお方によってしか救い取られる以外に、贖い出される以外に、自分の望みはないとの思いもまた強くするのです。このお方以外に自分の希望はない、と。そうして、ただひたすら滅びることなき、み言葉に繋がって生きる事を願い、み言葉によってしなやかな心にされる事を祈り願います。

どこでそのように切望するのでしょうか。礼拝で。私達の主イエス・キリストは、今は父の御許に帰り、私達は目で見ることできません。触る事もできません。私達は心細い。しかし、主イエス・キリストは、霊なる御神として確かに私達の内に、私達の間で働いておられます。この事を信じて、私達は、毎週日曜日、共に父なる神を礼拝します。主の十字架の前で心低く額ずき、神を大きくして礼拝します。自分の罪を思い悔い改め、また、心の重荷を降ろして神を見上げるのです。切なる願いをもって神の御前にも出ることもあるでしょう。それはまるで、終わりの日、目に見えるからだをとって再び来られる主の前に立つ時の在り方に通じるものがあります。私たちは終わりの日の自分を想って、神を礼拝します。終わりの日、神と人の子の前に立つ時を想って礼拝し、そこで神の言葉を聞く、赦しの言葉を聴くのです。終わりの日の礼拝が、私達を主イエスの言葉に堅く結びつける、と言ってよいのだと思います。ですから、毎週の日曜日の礼拝は、終わりの日のリハーサルと言ってもよいと思います。神を礼拝して生きることこそ、決して滅びないイエス・キリストの言葉に生きることです。

## 5 信仰共同体で

そして忘れてはならないのは、私達は、礼拝して生きる事を個人では行えないという事です。今まで主は終わりの日の事を語られましたが、その時、一度として「あなた」とは呼びかけておられません。一貫して「あなたがた」と会衆を呼んでおられる。そうする事で、主は、会衆を「信じて滅びから救われる群れとなりなさい」と招いておられます。

私達もまた、信仰共同体の一員として、主イエス・キリストの言葉に深く結びついて生きるのです。そのように礼拝しつつ生きる教会を、主イエスキリストはご自身の体としてくださいます。そう、神の言葉と深く結びついて礼拝する教会は、この世を生きるイエス・

キリストの体とされるのです。ですから、み言葉に深く結びついて生きるとは、イエス・キリストの一部として生きる、という事に他ならないのです。それが、決して滅びないキリスト・イエスの言葉に生きるという事だと思います。このように礼拝を通じて、「決して滅びない」というイエスキリストの体の一部とされ、救われる身の幸せに驚きつつ、神の深い愛をほめ歌い、2021年度も、愛する横浜ナザレン教会の皆さんと共に歩んで行きたいと願っています。